

別格本山 大圓院

横笛田

瀧口入道旧蹟

はじめに

今から九百年程の昔、当院第八世住職瀧口入道にまつわる横笛との悲恋の話です。

瀧口入道（齊藤時頼）は、平安時代末期の武士。齊藤茂頼の子で、母を早くになくしました。身長は六尺（百八十センチメートル）近くあつたといいます。

恋人「横笛」への思いを断ち切るために出家し、「瀧口入道」と呼ばれました。この悲恋は「平家物語」にあり、一八九四年に高山樗牛がそれらを題材に『瀧口入道』を発表し有名になりました。

長い月日は経過しておりますが、「横笛」が驚となつてやつてきた梅の木や井戸が今も当庭園にあります。歴史に想いを寄せどうぞご覧下さい。



Copyright (C) 2010 Daienin All Rights Reserved

第一会

鶯は大円院で今日も鳴く

一切煩惱皆空なりと

柳原 白蓮

これは平安時代のお話でございます。

その夜京都西八条の平清盛の邸宅で百余人を集めた宴が開かれておりました。

白拍子、平惟盛と舞が続き、いよいよ今夜の最後の余興、雜司、横笛の舞、春鶯転でございます。

年の頃十六、七の娘のあでやかな舞に騒がしかった宴が静まりかえり、陶然として見入るばかりでございました。

その夜から若い武士の間で横笛は大変な評判となりました。翌日から大変な数の恋文、プレゼントがこの乙女の朝夕を悩ませたのでございます。

若い武士達は皆恋に落ちたのでございます。

平重盛に仕える斎藤時頼もその一人でございました。



Copyright (C) 2010 Daienin All Rights Reserved

第二会

二十三才の時頬は身長百八十に近い六波羅武士でございます。名もしらぬうつくしい雑司の舞姿に初めて恋を知った時頬はようやくの思いで名前を聞きだしたのでございます。その日以来、三日とあげず切々とした思いを文にして送つた時頬でございましたが、までどくらせど返事は返つてしまひません。

「私の思いは未だとどかぬのか」

恋に悩む若者は日頃の快活さも消え、病氣ではないかと人には聞かれる有様でございます。

思いなやむ時頬の恋心はますますつよく、今では結婚する女性はこの人しかいないと思うまででございます。

結婚を決意した時頬は父にこの思いを告げ、許しを乞いました。

身分のちがうこの申し出に、時頬の父は大変お怒りになり、猛反対。

父に逆らうわけにはいかぬ時頬は恋しい横笛への思いを断ち切る為に京都の往生院におもむき出家をしたのでござります。



Copyright (C) 2010 Daienin All Rights Reserved

第三会

一方、思いがけずあの舞台以来、恋文がひきもきらざの日々の横笛は、所詮は殿方の遊び心と恐れて焼き捨てておりましたが、三日にあけずとだけられる時頼の手紙だけには心惹かれていくのでございます。

月日が流れ、手紙の数も一つ減り、二つ減りしても時頼だけは変わりありません。

ふるえる指で封を開き文面に目を通すとあふれんばかりの誠と思いの切実さ、・、・、・、

今更返事も書けずと思い悩むも時頼を慕っていく横笛に時頼からの手紙が突然とだえたのでございます。

程なく時頼出家の噂を耳にした横笛は、その理由を知り青ざめてしまします。

世を捨てて出家するほどに恋い慕ってくれた時頼を探しに御所を出たのは七月の半ば。

往生院の庵室の時頼に今までの思いをうち明け、許しを乞う横笛に、今となつては過去のことと取りも合わない時頼、・、・、・、



Copyright (C) 2010 Daienin All Rights Reserved

第四会

往生院の門のしたで一夜を泣き明かしながら、誠の道に入る決心をした横笛は、叔母のいる奈良の法華寺で尼僧となりました。

寺の近くのお堂で時頼からの多数の恋文を一枚、一枚水でとかし、自坐像の紙はりこを作りながら光明皇后の追善供養に精進しております。

修行中の横笛は、ある時おもいがけなく、時頼が高野山で修行していることを伝え知るのでございます。

瀧口入道（時頼）への想いが断ち切れない横笛は、女人禁制の高野山に一番近い天野の里へ移るのでございます。

我が思う 人の忘れ難きを 如何にせん

しかしながら、ささやかな庵室での修行が少しづつ横笛の体をむしばんでいくのでございます。



Copyright (C) 2010 Daienin All Rights Reserved

第五会

厳冬の高野山の寒さを避け、天野の里に下りた僧がありました。

春になり高野山へ戻ったその僧が、たまたま瀧口入道に、天野の里の横笛という尼僧の話をします。数日後、瀧口は横笛に、歌を送ります。

我そるまでは 恨みしかど梓う
真の道に 入るぞうれしき

早速の横笛の返歌

そろどても 何か恨まん梓う
引き止むべき 心ならねば

瀧口を思う横笛は病に伏す日が多くなります。

ある日の瀧口の歌

高野山 名をだにし知らで

憂きをよそなる 我身なりせば

病の床の横笛の返歌

やよや君 死すれば登る高野山

恋も菩提の 種とこそなれ

病魔はじわじわと横笛を蝕んでいくのでございます。

この病魔との戦いは横笛十九才の暮れ間際、花と散るのでございます。
余りにも美しく年若い横笛の死を悼み天野の里の人達は、庵のそばに塚を作ったのでございました。

「横笛のお墓」と伝えられるお墓が和歌山県かつらぎ町天野（あまの）にあります。

ここで横笛は鶯に化身をして、思いを伝えるのでございます。



Copyright (C) 2010 Daienin All Rights Reserved

第六会

高野山の清淨心院谷の入り口にあつた大圓院（もと多聞院と言つた）で修行していた瀧口入道は、やがて高野山大圓院第八世代住職となり阿淨と称しておりました。

春うららかなある日、大圓院の部屋から外を眺めていた阿淨が庭先の古梅の枝の一羽の鶯に気付きました。

鶯は鳴きながら阿淨をじつと見つめていたそうでございます。

いぶかしげに窓から身をのりだした瞬間、鶯はぱっと空へ舞い上がつた、と見る間もなく二、三度弱々しく羽ばたいたかと思うとすーっと井戸へ落ちていったのでござります。

「横笛！」

青ざめて阿淨は井戸へ駆け寄りました。

幻影であつたのでしょうか？

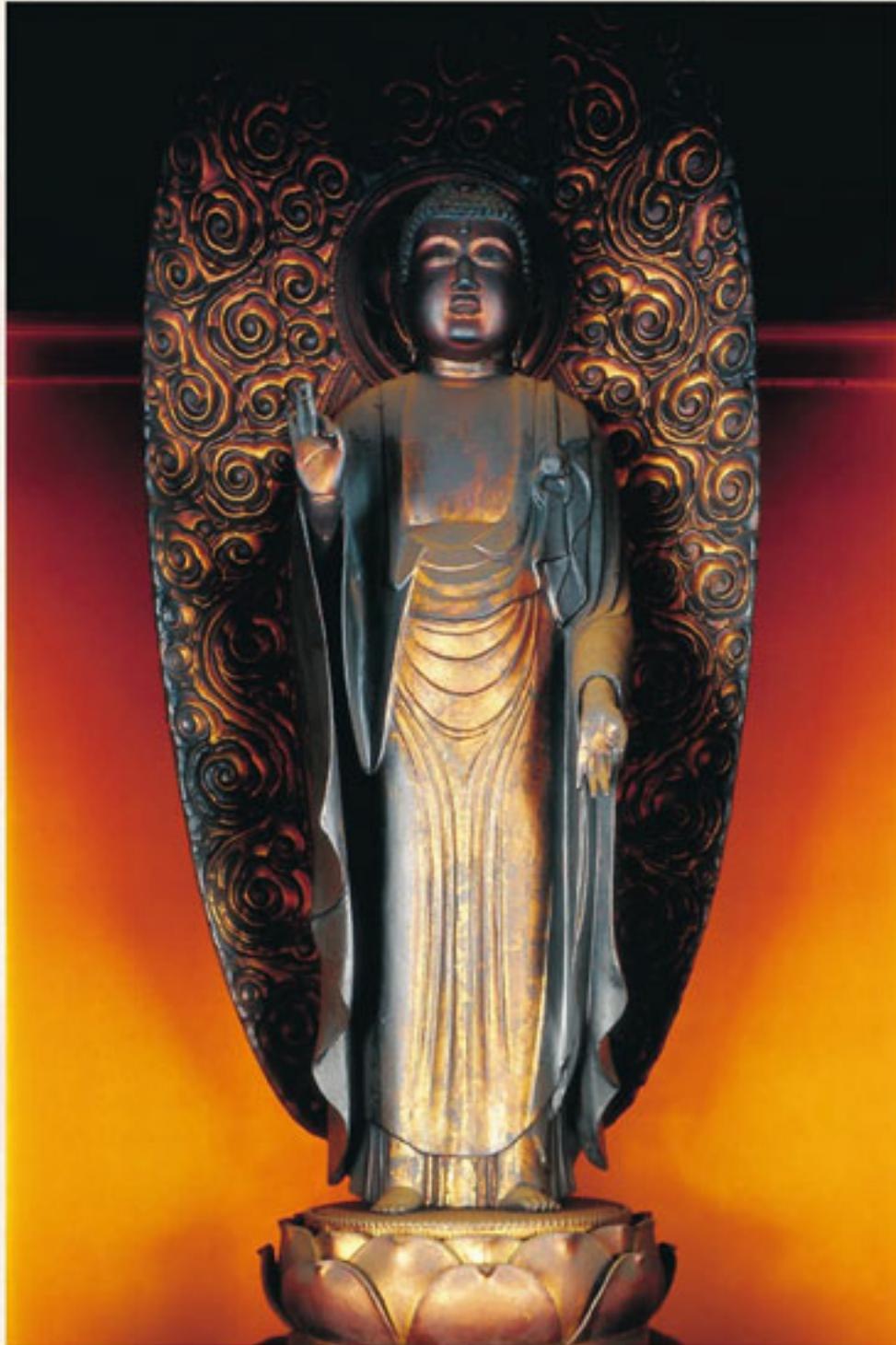
羽ばたいた鶯の後ろの空のちぎれ雲は、丁度横笛の舞衣の様で、崩れ落ちる鶯が、病み衰えた横笛に見えたのでござります。

第七会

阿淨は、井戸から鷺をすくい上げ、その亡骸を胎内に収めて阿弥陀如来像を彫ったのでございます。

この像は鷺阿弥陀如来像として大圓院の本尊となり、現代に至るまで伝えられているのでございます。

了



本尊 阿弥陀如來像